

子どもの本だな 71

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

へんなどうつぶ

ワンダ・ガアグ 文と絵 わたなべ しげお 訳 (瑞雲舎)
ボボじいさんは、いつも洞穴の前においしいものを用意して、動物や鳥が来るのを待っています。ある日、見たことのない変な動物がやってきて「ぼか どうつぶ！」と名乗りました。どうつぶは、人形が食べたいとねだります。困ったボボじいさんは、どうつぶの背中に並ぶ青いとげとげを褒め、「じゃむ・じる」を食べればもっときれいになると勧めました。どうつぶはボボじいさん手作りのじゃむ・じるが気に入り、毎日食べに来ました。しっぽはどんどん長くなり、とげとげは光り、山のとっぺんに座ったどうつぶは、山の周りに自慢のしっぽを巻きつけて大満足でした。

人形を取り上げられて悲しむ子どもたちを思っ
て涙するやさしいボボじいさんと、やんちゃ
などうつぶのやりとりが笑いを誘います。見開
きに対称的に描かれた黒一色の絵もユーモアに
あふれています。4歳くらいから。(池田)

シェパートン大佐の時計

フィリップ・ターナー 作 神宮 輝夫 訳 (岩波書店)
デイビドの父親の仕事場には大時計がありま
す。持ち主のシェパートン大佐は40年もの間、
時計を引き取りにきません。

ある日、不自由な足のことでしずんだデイビ
ドの気を紛らわせようと、友だちのアーサーと
ピーターは教会の屋根にのぼることをもちかけ
ました。教会に入り込んだ3人は、パイプオル
ガンの中で古い新聞の切れ端を見つけました。
それはシェパートン大佐の謎の死に関する記事
でした。デイビドの祖父に大時計を預けた直後
に死んだ大佐になにながあったのか。3人は古
い新聞、地図、町の人々の記憶と、手がかりを
集めました。

大佐の英雄的な死、時計に託された秘密が3
人によって解き明かされます。足の手術後も自
信をもてなかったデイビドが、大佐の勇敢さを
思い起こし教会の鉛泥棒に立ち向かう姿に共感
します。12歳くらいから楽しめます。(竹内)

9月	10月	9・10月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
12日	10日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
19日	17日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
26日	24日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

<お知らせ>

9月28日(土)

特別夜間開館をします

中庭で行われる黄昏コンサート
にあわせて、開館時間を20:00
まで延長します。ランプシェードの
展示や特別おはなしの時間があ
りますので、気軽においでください。

特別おはなしの時間

- ・時間：18:30~19:00
 - ・場所：図書館 おはなしの部屋
 - ・対象：4才~大人
- ※途中からは入れませんので、
時間までにお越しください。

『庭とエスキース』 奥山 淳志 著

みすず書房 284頁 2019年4月刊 3,200円 (請求記号) 740.2

これは著者が、弁造さんの「生きること」に触れ、撮り続けた14年間を、写真と共に綴った写真集である。

出会いは1998年春、著者が25歳、弁造さんが78歳の時。当時出版社で働いていた著者は、ある雑誌の取材で、北海道にある小さな丸太小屋で自給自足の生活をする弁造さんを訪ねた。この出会いが忘れられず、その後仕事を辞め、移住先の岩手で写真家として活動し始めた時、「弁造さんのことをしばらく撮らせて欲しい」と半ば押しかけるように再び丸太小屋を訪れた。「あんたが好きなきに来りやあいい、わしは毎日、ここにいるだけじゃ」弁造さんは笑って受け入れ、以来、季節が変わるたびに、相棒の黒犬さくらと一緒に津軽海峡を渡り、弁造さんを訪ねる日々が始まった。

弁造さんは大正9年、北海道新十津川に生まれ、自給自足の生活をしながら自作の丸太小屋に暮らし、一大家族が永続的に暮らせる庭を作りながら画家になることを夢見て絵を描き続けていた。カラマツやサトウカエデの林、プラムやサクランボなどの果樹や山菜、畑、池などで構成された庭は、弁造さんの生き方や思考が込められ、新緑や紅葉や収穫など自給自足の喜びが詰まっていた。部屋の真ん中に置いてある大きなイーゼルにはいつも描きかけの絵があった。絵は仕上がることなくそのほとんどがエスキース(下絵)のままに終わり、完成した絵はたった1枚、母娘の絵だけだった。

「わしが死んだら全くの無になる。ゼロじゃ。」老いを受け入れ、死後の準備をし、震える手で絵を描き続けた弁造さん。自分のものではない他者の人生、「遠くにある人生」に触れたらと思えば、それが他者にカメラを向け撮ることでも可能になるのではないかと14年もの長きに渡り弁造さんを撮り続けた著者。弁造さんを通じ、生きること・老いることとは何かを著者は問い続けていく。2人の何気ない会話や日々の記憶を、40枚の写真と共に紡いだ文章は穏やかで、手元に置いて毎日少しずつ読んでいきたいと思わせる本だった。

(池之上)

9月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
1	2	X	4	5	6	7
8	9	X	11	12	13	14
15	16	X	X	19	20	21
22	23	X	X	26	27	28
29	30					

10月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
		X	2	3	4	5
6	7	X	9	10	11	12
13	14	X	X	17	18	19
20	21	X	23	24	25	26
27	28	X	30	31		

※25~31日の■は特別館内整理のため休館。返却のみ受付(10:00~17:00)

*カレンダーのX印は休館日 *■は館内整理日、返却のみ受付(10:00~17:00)
*開館時間は10:00~18:00、金曜日と○9/28(土)は20:00まで閉館

<お知らせ>

13歳からの読書会
『地下の洞穴の冒険』を読んで
・日時：10月5日(土) 14:00~15:30
・場所：図書館 読書会室
・対象：中学生以上(要申込)
・準備：当日までに本を読んできてください。

『地下の洞穴の冒険』
リチャード・チャーチ著 岩波書店
夏休み、洞穴の入り口を見つけた5人の少年は、洞穴探検に出かけました。ところが、深い罅の底におりた時、ロープがはずれ、2人の少年が取り残されてしまいました。

地下水

夏休みは連日多くの方が図書館に来られ、忙しくも充実した夏を過ごした。

図書館では、8月10日の土曜日にダンボール工作教室を開いた。ダンボールからパーツを切り抜き、ボンドで貼り付けて動物を作るというもので、図書館の児童閲覧室にも色々な動物が飾られている。今回の工作教室では「ぞう」「うさぎ」「プレシオサウルス」の三種の中から1匹を選び、子どもたちに作ってもらうことにした。大変盛況で、参加者の募集を始めてから、あっという間に定員が埋まってしまった。当日、読書会室が窮屈に感じるほどの人が集まり、1人の欠席者もなく、無事に開催することができた。小学1年から5年までの子どもが集まったが、いざ始めてみるとおしゃべりしながらもどんどん作業を進めていた。終わった後は出来あがった作品と記念撮影。「楽しかった」という何気ない言葉が何よりうれしかった。

(光藤)

